

Title	子どもの自立に対する母親の意識についての一考察
Author(s)	上西, 幸代
Citation	大阪大学教育学年報. 2000, 5, p. 113-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4607
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

子どもの自立に対する母親の意識についての一考察

上 西 幸 代

【要旨】

子どもの自立に対する母親の意識について、面接調査での事例をもとに考察を行った。まず、乳児期から成人期までの親子関係の発達を、子どもの側からと親の側からの2つの視点から概観し、親と子それぞれが子どもの自立をどのように経験するのかについて考察した。面接調査の結果からは、母親が子どもの自立を認識し始める時期や、子どもが自立しているか否かを判断する基準を抽出した。また、母親が子どもの自立を感じた際に寂しさや空虚感を体験したかについても、事例を紹介しながらまとめた。これらの結果から、多くの母親は、子どもの自立が比較的長い時間をかけて行われるものであると認識していることが推測された。また、子どもの自立に際して寂しさや空虚感を抱いた母親も見られたが、その寂しさや空虚感が長期間にわたって継続することは少なく、子育て終了後自分自身の時間を楽しめるようになっていく様子が伺われた。

1. はじめに

子どもが青年期を迎え、親からの分離を成し遂げようとするとき、親もまた子どもからの分離を果たさねばならず、家族のあり方も変化していく。近年、親離れ・子離れの困難さが指摘されることが多いが、子どもの自立は、子どもにとっても親にとっても大きな変化の経験であると考えられる。いったい母親は子どもの自立をどのように受け止め、どのようにこの親子関係・家族関係の変革を乗り切っていくのだろうか。筆者が行った面接調査から、母親の生の姿を浮き彫りにしてみたい。

2. 母子関係の発達について

まず、これまでの親子関係がどのようなものであったかをふまえるために、子どもが乳幼児期から成人期にいたるまでの母子関係の様相を発達的に述べ、子どもの自立がどのように経験されるのかについて考察する。

1) 子どもの側から

人間の子どもが生まれて生きていくためには、母親に代表される養育者（以下、母親または親と記述）の存在が不可欠であるが、一見無力に思われる乳児も、母親に対しては泣く・ほほえむ・見つめるなど様々な働きかけを行っている。親がこれらの信号を受け取り働きかえしていくことにより、親子の間には特別な相互的・情緒的つながり（愛着 attachment）が形成される。このようにして形成された親子の心の絆は、人間に対する基本的信頼の源泉となり、安定したパーソナリティを形成していくもととなる。

歩行や会話が可能になると、幼児は母親から独立した存在として周囲の世界を活発に探索し始める。市橋（1983）は、「分離個体化期は、母親から離れるという一つの危険ではあるが、一方一人でも移動したり、活動したりする喜びと満足を見いだす時期」であると述べている。しかし、この時期の子どもは、実際に母親が側にいなければ不安になることが多く、Swigart（1991）も「マラーンによれば、初めて自律という甘い果実をかじってしまった幼児も、まだ『燃料補給』はしてもらわなければならない——言い換えれば、幼児が世界を探検した後、走って戻る場所として、ケアの与え手にはそこにいてもらわなければならない」と指摘している。このように、幼児期の子どもは、母親を基地として外の世界の探索を押し進めていく。

小学生にあたる児童期は、親子関係も比較的安定しており、関係も相互交渉的なものになる。友達・教師といった新たな対人関係が生まれ、子どもに対する親の影響力が弱まってくる。子どもが親に援助を求めるのは「必要が生じたときだけ」（久世 1994）になるが、親子関係は依然子どもの心の拠り所として存続し続ける。しかし、岡堂（1984）は「自らのつらさを察してくれない親との関係は、次第に疎遠となり、心理的には早すぎる親離れが始まることになるであろう」と指摘している。

10代のはじめになると、子ども達は心理的にも身体的にも様々な変化を急速に体験する。「彼らの社会的役割は新しい形の上に築かれ、子ども時代にもっていた自己感、彼らの新しい外見や、異性に対する新しい感情に、もはや合致しなく」（Thoumas 1979）なっていく。自分に対する関心の高まりとともに、両親との強い情緒的な融合関係に抵抗を感じ、今まで依存していた両親からの独立を試みる。その代表的な試みの一つが秘密を持つことである。思春期になると子どもは親に対して秘密を持ち始め、そのことによって「親とは違う存在である自分」を意識し始める。また、仲間や友達が心の中の重要な位置を占めるようになり、親よりも友達といることを好むようになる。齋藤（1989）は、この時期の子ども達は自分の部屋や机に鍵をかけ、秘密を知られることに強い恥と怒りを感じ、何気ない親の世話を自分の世界への侵入として受け取ったり、親のコントロールにきわめて過敏に反応しがちになると述べている。菅（1994）は、こういった親に対する「怒りやいらだちがエネルギーとなって、親からの分離が成し遂げられるといっても過言ではないであろう」と述べ、「思春期の親に対する反抗は、子として自立してゆくための、不可避的な修羅場である」と語っている。ところが、両親からの離脱は両親との一体感を失うということであり、心身の変化に対する不安や、大人と子どもの間という社会的地位の不安定さも手伝って、一時的に孤独感や悲哀感を感じやすくなる。青年達は不安定な自分を支えるために母親に甘えたい、依存したいという気持ちを強く持つようになり、親への感情は非常にアンビヴァレントなものとなっていく。しかし、村瀬（1983）はジョセルソンの言葉を引用して「青年は一方で両親から距離を置くようにと変わっていくが、これとある程度平行して、この喪失を補うべく新たな結びつきを作っていくと努力を行う」と述べている。一般的に、青年は、徐々に理想化や同一視の対象を同性の友人へ移し（浴野 1994）、異性への関わりへと進んでいく。

高校生以降になると、青年はより客観的・自覚的になり、両親の欠点には依然厳しい批判を浴びせながらも「同時に両親の生育史や現在の環境などにも目を注ぎ、同情や共感もでき

るようになる」(西平 1990)という。村瀬(1983)も「親を否定する時期を経て、再び新しい目で親を肯定化し、親の立場への理解・洞察が生まれる」と述べている。

このような親からの自立の過程は心理的離乳と呼ばれており、「幼児期につぐ第二の分離-個体化期としての意義を持っている」と指摘される(馬場 1987)。しかしながら、現状では、まだ親の家に住み、経済的には親に依存している者が多い。近年では、親への反抗よりもむしろ親との情緒的結びつきの強化が指摘されており、それについて東山(1992)は、「現代の若者達には、大学時代の下宿や遠く離れた地での就職といった合法的家出によって自立を成し遂げようとする風潮がある」と述べている。

青年期後期は職業の選択が重大なテーマの一つとなるが、これにより子どもの多くは就職して社会的・経済的に親から自立するようになる。やがて子ども達は結婚し、今までの家庭から離れて新たな家族システムを作り上げていく。子どもは良くも悪くも親を成人のモデルとしてとらえ、自分自身の生き方を模索していくと考えられ、親子関係も大人どうしの相互に助け合い、尊重しあう関係になっていく。

2) 母親の側から

母親は自分のからだの一部分であった子どもに、分娩後初めて分離した個と個として出会う(武内 1994)。生まれたばかりの子どもは、母親が授乳・食事の世話などのケアをしなくてはならない。母親はそうした関係を通して乳飲み子に同一化し、一体感を覚え、かつて自分自身の母親と共有した排他的な愛情を再体験することができる。玉谷(1985)は、「完全に自分を必要としてくれる存在が目前にいるということ、可愛いという全く肉体的ともいえる喜びは、子を持つ以外」あまり得られないであろうと述べている。しかし、「子育ては楽しくやりがいのあるものである一方、たいへんで難しい面をもあわせ」(武内 1994)もつ。母親は子育てに多くの時間を費やさなければならず、自分自身のための時間をとることも困難である。大崎(1988)は、子育てには長時間労働による疲労、他の活動を制限されることによる欲求不満、生存に關与する緊張感、正答がなく不安要素の大きい労働、評価の低い労働という否定的な点があると指摘している。

子どもがハイハイやヨチヨチ歩きができるようになると、親が子どもの行動をみて一喜一憂することも多くなる。芹川(1984)は「何にでも手を伸ばし、それを手に入れようとして近づいていこうとする子どもの姿は、親にとっても喜ばしいものに相違ない」と述べている。さらに歩行や会話が可能になると、子どもは周りの世界を自由に探索しはじめる。自己主張が強くなり、危険から守ろうとして子どもの行動を制止したり、身辺自立へ向けてしつけを行おうとする母親と衝突し、母親に反抗的な態度をとる一方で、幼児はすぐまた母親を求め母親が側にいることを要求する。しかし、幼児が5~6歳になると、母親は子どもを危険から守ってやるために始終気を配っていなくともよくなり、母親の役割も「子どもたちが新しく獲得していく精神や運動面でのスキルをひそかに見て喜ぶといった、より間接的なものへと変化」(Swigart 1991)していく。

小学校に上がる頃になると子どもも扱いやすくなり、自分のことはある程度自分でできるようになるため、親はあれこれ手や口を出して干渉しなくてもよくなり、多くの点で楽にな

る。ほとんどの親は、わが子の成長を喜び、誇らしさや安堵・達成感のようなものを感じ、子ども以外のことに使える自由な時間を楽しむこともできるようになる。子どもが小学校へ入学したことによって、新たに教師が子育てに加わり、一般に親の関心も子どもの成績や学校での子どもの様子に移っていく。この時期の親は「子どもがどの程度の親密さや保護を求めているかより、どの程度の距離や『空間』を必要としているかに気を配るように」(Swigart 1991) となると考えられる。

思春期頃になると、子どもは外の世界に関心を持ち始め親を避けたり、無愛想になったり、親とよりも友達とのつきあいを優先したりし始める。斉藤(1991)は、思春期になると「親子の間に長期にわたって定着している『一定のつきあいパターン』、双方の『呼吸』が急激に崩される」と述べている。母親は、「この『密着』した関係から『分離』した関係への変化」(東山 1992)を、「子どもにせまられてやむなく受けとめていかなければならない」(東山 1992)といえる。一般的に子どもが自立してく様子は、親にとって喜ばしいことであると同時に、淋しくもまた悲しくもあることが多く、なかには子どもの愛着や依存を失うことを耐え難く感じる母親もみられる。子どもの親離れや結婚は母としての「世話する」役割の終了を意味しているといえる(東山 1992)。岡本(1994)は、子どもの自立による母親役割の喪失感、「空の巣」の状況に対する不安定感が大きいと、台所症候群(台所に立つとめまいや吐き気、頭痛などがおこり、炊事が手に着かなくなるもの)、アルコール依存症、空虚感・無力感・抑鬱感のような不定愁訴などの背景になると述べている。東山(1992)や斉藤(1991)もまた、幼児的親子関係へのしがみつみや「親離れ」徴候への過剰な感情反応、さらには“見捨てられ”か“見捨て”かといったきわどい修復困難な関係などが出現することがあると指摘している。しかし、子離れは自分の存在意味を問い、これまでとは質的に異なった配偶者や子どもとの「関係」と「距離」を構築し、新たな可能性を実現する機会でもある(東山 1992)。子どもの自立にあたって喪失感や自分の人生の課題に直面する親も確かにいるが、逆に新しい可能性を発見して、それを磨き始める者も少なくない。「親子関係における種々のズレや葛藤、相互疎外も、青年期の後期には再び安定化し、新しい次元での相互依存的な」(斉藤 1991)対等な大人どうしの親密な関係が続いていくようになっていく。

子ども達が青年期に達すると、やがて就職・結婚を迎え自立をなしとげていく。親と子という縦の関係は依然として変わらないが、親が子どもに助けられることも増え、両者の力のバランスは対等なものへと変化する。子どもが家から出ると、家族は夫と2人だけになることが多いが、子どもとはその後も交流が保たれることが多い。特に娘とは出産などを契機に関係が深まることもあり、孫が誕生すると母親は新たに祖母としての役割が求められるようになる。無籐ら(1997)の面接調査によると、職業を持つ娘のライフスタイルが「実母の絶大なサポートの上に」維持されているケースが多くみられたという。特に住居が近くである場合には、祖母が働く娘を助けて孫の世話をすることも多いようである。

3. 面接調査の概要

子どもの自立に対する母親の意識についての手がかりを得るため、以下のような面接調査を行った。

1) 目的

子どもの自立に伴う母親役割の縮小または終了が母親に与える影響に注目しながら、母親が子どもの自立に対してどのように感じているかを考察する。

2) 対象者の構成

子どもが全員就職（ただし、就職後辞職したものを含む）または結婚している42～59歳の母親22名（平均年齢52.7歳：A～Vさんとする）。対象者をこのように限定したのは、就職によって子どもは経済的自立をほぼ成し遂げており、結婚に至っては、配偶者の存在によって親子関係よりもある意味で密接な関係が結ばれたと考えられるため、子どもの自立を感じている母親が多いのではないかと推測したからである。なお、対象者の子どもの人数は54名、年齢は23～33歳（平均年齢25.7歳）であった。

3) 調査時期

1995年10月上旬～11月下旬。

4) 調査方法

半構造面接を実施した。面接時間は30～120分、場所は対象者宅・筆者宅・喫茶店などを利用したが、ほとんどの面接を個室で二人だけで行うことができた。

5) 調査の内容

インタビュー調査の内容は以下の通りである。

(1) 対象者の現在の年齢、職業、家族構成、子どもについて。

(2) 子どもの自立について

それぞれの子どもが今現在自立していると感じるかを尋ね、同時に子どもが自立し始めたと感じた時期、さらに自立が完了したと感じる子どもについては自立し終わったと認識した時期を確認した。

(3) 子どもの自立に際し、寂しさや空虚感を体験したか、について

「子どもの自立を感じて、寂しく思ったり空虚感を感じたりしたことがありましたか」と質問し、「寂しかった」と答えた人については、「空虚な感じもしましたか」と追加して尋ねた。

4. 結果と考察

以下に、面接調査の結果と考察を述べる。今回のレポートでは、できるだけ面接中に語られた生の声を拾って考察を進めていく。

1) 子どもの自立に対する母親の認識

①子どもの自立に対する認識の有無

対象者である母親22名、その子ども54名のうち、すべての母親が53名の子どもに対して「自立し始めている」「自立の過程にある」と感じていた。しかし、「自立し終わって完全に大人として一人前になった」と感じているのは、9名の母親が12名の子どもに対してのみであった。

今回の調査では、母親に完全に自立していると認識されている子どもは全体の1/4以下とかなり少数であった。しかし、ここからだけでは子どもの自立の時期が遅いのか、母親が子どもが自立したと判断する時期が遅いのかは明らかではない。中には、「客観的には自立していると思うけど認めたくない」(Aさん)、「上の子(長男)はもうずっと自立しないような…親の気持ちとしてはね」(Bさん)という意見もあり、子どもの自立を素直に認めたくないという母親の心情も報告された。

②子どもの自立を感じたとき

「いつ子どもが自立し始めたと感じたか」という問いに対する答えをまとめると、図1、図2のようになった。全体的に見ると16～22歳に集中しているが、これは子どもが高校・大学に通う年齢である。特に大学に通う年齢に相当する19～22歳が最も多くなっている。

子どもの自立を感じた時期を子どもの性別で分けてみると、男女でずれがみられた。娘の場合は、ほぼ19～22歳に自立を感じる時期が集中しているが、息子の場合にはかなりばらつきが見られた。息子が自立し始めたと感じる時期は娘よりも早いことが多いが、反対にかなり遅くまで自立したと認識されない場合もあることがわかった。これらの理由については、男女で求められる自立の形がやや異なることや男女で自立の発達のプロセスが異なることなど、さまざまなものが推測される。

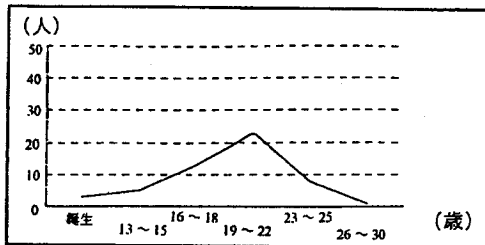


図1 子どもの自立を感じ始めたとき

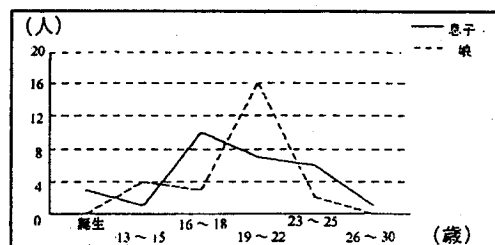


図2 子どもの自立を感じ始めたとき (男女別)

③自立しているかどうかの判断基準

表1は、「子どものどういう面を見て自立し始めた、またはもうこれで自立したと感じたか」、あるいは「子どもがどのようになればもう自立したと思うか」、「なぜ子どもがまだ自立していないと思うか」などの質問に対する対象者の答えを整理したものである。

表1 自立しているかの判断基準

	自律性	経済的	別居	結婚	しっかり	対等
人数	13	9	7	5	3	3

(単位：人)

子どもが自立していると判断する基準として、「子どもが主体的に責任を持って、自分の歩む道を選択し生きているか」という自立の自律性をあげた人が13名と最も多かった。具体的な発言としては、次のようなものが挙げられる。

【(自立を感じたのは) 自分で就職を決めだしたときかな】(Bさん)

【何でも自分ですからね。家にいるけど下宿人っていう感じだったわ。といっても精神的なつながりは大きかったけどね】(Mさん)

【大学のことは自分で決めた。親の判断の余地なかったからね】(Nさん)

【自分の考えっていうのを持つようになって、親に意見するようになった】(Kさん)

【精神的には個っていうのを持ったときがそう(自立を感じた時)やね】(Pさん)

ここで、自律性につながるものとして、「しっかりしている」というような全体的なイメージをあげたものも3名みられた。また、「子どもに教えられることもある」といった子どもとの対等な、あるいは逆転した関係を挙げた者も3名あった。

【ぱっと一人になっても、うちの子は一人で生きていけるやろうっていうぐらいには思ってる】(Aさん)

【主人をなくしてからしっかりしてきた。勤めてからぐっと変わってきた。だんだん私が頼るところもあるし、教えられるところも多いし。やっぱり若い人の意見っていうのも参考になるしね】(Eさん)

【困ったときとか主人とは違った助言をしてくれるし】(Dさん)

【今は女どうしの(対等な)つきあいをしています】(Gさん)

また、自立の経済的側面をあげた人も多く、9名みられた。具体的には次のように語られた。

【一応就職したときに、自分でねえ、賃金を稼ぐという意味では、ある程度自立してきたやろうねえ】(Iさん)

【(自立したのは) 勤め出して給料がやっと一人前もらってきた頃かな】(Qさん)

しかし、いくらお金を稼いでいても、アルバイトをしている子どもは充分自立していないと答える人が2名みられ、経済的自立の条件とは、定職を持ち、今現在だけでなく将来の生活の安定を得ることであるといえる。

【就職したときはもっと自立してたと思うけど、2年で辞めてアルバイトしてるし、結婚もしないから、今全く自立していない】(Qさん)

また、別居をあげた人が7名、結婚をあげた人は5名あった。別居は「自分で自分の生活を管理することができる」という観点からで、結婚は親の世話から完全に離れるという意味で自立と捉えられていた。

『離れて生活してるから。親と離れて苦労してるから（もう自立している）』（Sさん）
 『まだ、結婚してないから、家にいてたら駄目やねえ。まだ、お互いに頼ってるわねえ。持ちつ持たれつの関係やと思うわ』（Jさん）
 『やっぱりお嫁さんもらって、結婚して、もう私らが世話しなくてもいいようになったら完全に自立したと思うけど、それまでの間はまだ、ねえ』（Tさん）

以上から、子どもの自立を判断する基準として、第1にあげられているのが自律性、つまり精神的自立の側面であり、その他、経済的な自立、別居、結婚が重視されていることが推測された。

2) 子どもの自立を感じた時の母親の気持ち

先程も述べたとおり、「自分の子どもが全員自立し始めていると感じているか」という点に注目したところ、一人の母親をのぞいてほぼ全ての対象者が子ども全員の自立を感じていた。次に、「子どもの成長や自立に際して寂しいと感じたかどうか」という点について分けたところ、10名が寂しさを感じたと答え、11名が「寂しくはなかった」「平気だった」または「うれしかった」と答えた。さらに、「寂しいと感じた対象者を子どもの自立によって空虚感を感じたか」どうかで分けたところ、5名が空虚感を感じたと報告し、5名は寂しいとは思ったが空虚感を感じるまでには至らなかったと答えた（図3参照）。今回の調査では、「寂しさは感じなかったが空虚感を感じた」と答えた人はみられなかった。

つまり、全体の約1/2が子どもの自立に際して寂しさを感じ、さらにそのうちの1/2、全体からすると約1/4が空虚感を感じたと回答したことになる（図3参照）。

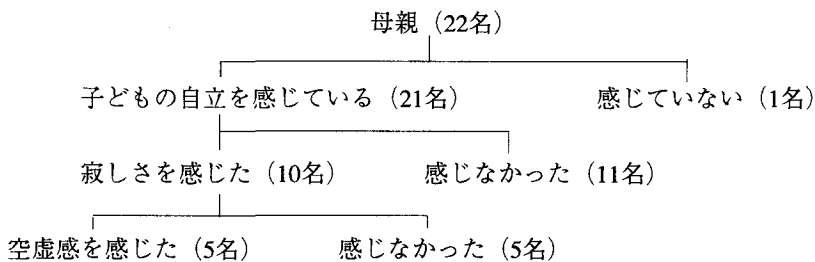


図3 子どもの自立に対する母親の体験の様相

寂しさや空虚感を感じた実際の例としては、次のようなものがあげられる。

『子どもがあんまり愛想をしなくなる時期ってあるでしょう、やっぱり男の子やし、ちょっと親離れしていったって感じかな。(略)華やかさもないしね、男の子やからね。帰ってきたらすぐ自分の部屋に入って、あんまり手が(かから)なくなるでしょ』（Bさん）

子どもが反抗期を迎え「子どもがついてこなくて寂しかった」と述べた例は上記を含めて4例あったが、それらはちょうど中学生あたりの年齢の息子に対してであった。反対に娘の

方は母親との関係が保たれることが以下の例から推測できる。

「子どももそれぞれ大きくなってきて対等にものがしゃべれるようになったりするでしょ？楽しいもんねえ。やっぱり色んなところに行ったりとか、だんだん話が合うようになったし、同性だし、その部分でもやっぱり楽しかったし…」(Aさん)

このことは、娘は思春期に入るとより母親を求める時期があるのに比べ、男子の場合は「急に無口になり、『べつに』『関係ない』などと不機嫌をよそおい、とりつく島もない」という東山(1992)の指摘に似ている。また、1)の②で述べた息子の自立を感じる時期が娘の自立を感じる時期よりも早いことの一理由の一つになっているのではないかと考えられる。

先述の4例以外に寂しさを感じたと答えた3例は、ともに就職や大学卒業に伴う子どもの自立や子どもの交友関係のひろがりに対してであった。

「(今は)子どもは私を見捨ててるでしょ？最近、それがむなしい、ものすごく(笑)。(略)毎日子どもが帰ってくるのが遅かったりとかお友達とどこかに行ったりして一人だけになるときがあるんやわ。(そういうときは)やっぱり寂しいんやわ…子どもが社会に出ていっぺんに寂しくなったなあ…(略)それで奈落のそこにストーンと落とされて…」(Aさん)

「子どもがお嫁に長いこと行かない方がいい。(身勝手なことは十分わかっているが)できるだけ遅くにお嫁に行きたくないと頼んで。なるべく一緒にいたい。私が産んだ子なのにどうしてよそへ(お嫁に)行かなあかんのって(笑)。(略)ボーイフレンドが来ると(娘を)持って行かれそうな気がして嫌。(略)(娘は)私としゃべるのがいいのかな、ボーイフレンドとしゃべるのがいいのかな、どっちがいいのかなって考える訳」(Aさん)

「子どもが卒業したときは、空虚とまでは行かなかったけど、つまらなかった。主人との会話もないし」(Qさん)

しかし、以下のように、子どもの自立に際して感じた寂しさや空虚感も時間が経てばやわらいでいくことが多いように思われる。

「やっぱり結婚の時は一週間ほどだけやったけどね、寂しかった。後はもう、ちょこちょこ来るしね。(略)ちょっとの間だけ寂しかったね。いつもいるのが(いないと)ね。」(Fさん)

「一番上の子がね、就職し(て寮に入っ)たときは寂しいと思った。(略)泣けてきたときもあったわ。すごい寂しいと思ったけど、行ってしまったら「ああ、今度は一人減ってほっとした」って言って。すごい楽になったけどね。(略)1年もたったら楽でいいわと思うようになった(笑)」(Iさん)

「次男が結婚したときはすごく寂しかった。(略)無力感っていうか、寂しかった。でも続いたのは3ヶ月ぐらい。次男夫婦といい関係がとれたからね。さっぱりしてはいるんだけど、いい関係でね、いられるということがわかったから」(Mさん)

寂しさについては、以下のように語る人も見られた。

「やっぱり(子どもが遠方に)行ったときはものすごく寂しかった。(でも、そこへ)行って、これから色んなことをするっていうことだから、その寂しさは子どもと離れるっていう寂しさであって、むなしい寂しさではないよね。離れる寂しさであって、期待のある…」

「ああ、これからあの子はどんな風にしていくのかな」っていうね」(Uさん)

このように、多くの母親が深刻な空虚感を長期的に感じることなく子どもの自立を経験していたことは、子離れの困難さが強調されやすい今日にとって、注目に値することであると思われる。考えてみれば、子どもの自立は、自立し始めたと感じられてから完全に自立したと感じるまで、かなり長い期間かけて認識されるものである。母親はいつかそういう時期がくると予測し、心の準備をし、そのプロセスの中で徐々に適応していくことが可能である。母親は自立した子どもをみて一抹の寂しさを感じながらも、その成長を喜び、子どもの未来を楽しみにすることができる。特に自立後も子どもと新しい関係を保つことができる場合には、母親達は自分自身のための時間が増えることをむしろ歓迎しているようである。以下にそのいくつかの例を紹介する。

「(充実感が増したのは) ちょっと子どもに手が離れてきて自分のことに時間が使えるようになったから。お金も時間も自分のために使えるようになったからやね」(Fさん)

「その時分(子どもが成長した頃)にお友達がたくさんできたからね。子どもはもう子どもって感じで、私はもうお友達とどンドン遊びに行くようにしてるしね。自分でそういう風に調節してるのかもわからないけど」(Lさん)

また、子どもの結婚によって嫁や孫ができ、今までの親子関係を新しい人々との間で再現していくことができるようになる人も見られた。

「今はなんかね、子ども＝孫って感じになってるんですよ。なんか自分の子どもみたいな気がしてね、毎日見てるとね」(Bさん)

5. まとめ

今回の調査では、子どもの自立の認識について、母親に完全に自立していると認識されている子どもは全体の1/4以下と少数であった。これには、東山が指摘するような親離れ・子離れの難しさが反映されているとも考えられるが、子どもを評価する母親の厳しい視線も感じられ、中には子どもの自立を感じながらもそれを素直に受け取りたくないという母親の姿も見られた。

先行研究(齋藤 1989、1991/東山 1992)にもあるように、親子関係の変化は特に中学生ぐらいの息子に対して、「愛想がなくなった」「反抗期」「帰ってきてもすぐに部屋に閉じこもってしまう」といった形で認識されることが多いようである。母親はこのとき少なからず寂しさを経験する。一方で娘とは親密な個対個の関係が生まれ、その関係を楽しむことができるようになるようである。しかし、実際に母親が子どもが自立し出したと感じるのは、もっと子どもが成長して「まだまだ子どもだと思っていたのに結構自分でやっている」「親とは違う意見を持ち出した」ということを発見したり、就職に伴う経済的自立の達成、あるいは子どもの自立が結婚、別居といった目に見える形で表れてからであるようである。

子どもの自立に際して、約半数の母親が寂しさを感じたと答えたが、一般的に、母親達は寂しさを感じつつも、それほど大きく動揺したりすることなく次の親子関係に移行できる場

合が多いようである。しかし、その中でも一時的にせよ、長期的にせよ、Aさんのように非常に寂しいといった思いを抱く人もあることを忘れてはならない。

6. 今後の展望

以上、面接調査の事例を紹介しながら、子どもの自立に対する母親の意識について考察を行った。子どもの自立は、親と子それぞれのライフサイクルにおいて大きな意味を持つ出来事であり、臨床実践においても自立と依存をめぐる力動は面接の鍵を握る重要な視点となりうるように思われる。今後は更に、子どもの成長に伴う親子関係の変化が親と子それぞれによってどのように体験されるのか、それぞれの人生においてどのような意味を持っているのかなどについて考察を深めていきたい。

7. 文献

- ・ 浴野雅子 1994 「女子青年の親子関係」 岡本祐子・松下美知子編 『女性のためのライフサイクル心理学』 福村出版 118-131
- ・ 馬場房子 1986 「熟年夫婦のストレスとその克服」 岡堂哲雄編 『現代のエスプリ』192 至文堂
- ・ 東山弘子 1992 「中年期女性にとっての子離れ」 氏原寛・東山紘久・川上範夫編 『中年期のこころ』 培風館 141-156
- ・ 市橋保雄 1983 「親と子のきずなを考える」 『周産期医学』 Vol.13、No.12、9-10
- ・ 久世妙子 1994 「子どもの発達」 久世妙子・内藤徹・内田照彦編 『現代の子ども』 福村出版 26-40
- ・ 無藤清子・前川あさ美・野村法子・園田雅代 1996 「複数役割をもつ成人期女性の加藤と統合のプロセス」 東京女子大学女子学研究所
- ・ 村瀬孝雄 1983 「V 思春期の様相」 飯田真・笠原嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井久夫編 『精神の科学6』 岩波書店 141-180
- ・ 西平直喜 1990 『成人になること—生育史心理学から』 東京大学出版会
- ・ 岡堂哲雄 1984 「親ばなれ・子ばなれ」の心理学」 児童心理38-9 金子書房 1-12
- ・ 岡本祐子 1990 「中年期 自己実現をめぐる」 小川捷之・齋藤久美子・鐘幹八郎編 『臨床心理学大系3 ライフサイクル』 金子書房 193-214
- ・ 大崎登志子 1988 「育児の小さな危機—母親の心理」 島田照三・黒川新二編 『母性喪失』 同朋舎
- ・ 落合幸子 1979 「人生の転換期における心理(Ⅲ)」 『日本教育心理学学会第21回総会発表論文集』 222-223
- ・ 齋藤久美子 1989 「青年と母親」 『青年心理』 金子書房
- ・ 齋藤久美子 1991 「親離れ」の受けとめクライシス」 『青年心理』 金子書房
- ・ 菅佐和子 1994 「女の子から女性へ—思春期」 岡本祐子・松下美知子編 『女性のためのライフサイ

クル心理学』 福村出版 73-90

・芹川正樹 1984 “精神科領域における親子分離の問題” 児童心理38-9 金子書房 79-85

・Swigart 1991 斉藤学監訳 橘由子・青島淳子訳 『バッド・マザーの神話』 誠信書房 1995

・武内珠美 1994 「母親になること、および子育てをめぐる問題」 岡本祐子・松下美知子編 『女性のためのライフサイクル心理学』 福村出版 157-176

・玉谷直美 1985 『女性の心の成熟』 創元社

・Thomas,R.M. 1979 小川捷之・林洋一・新倉涼子・岡本浩一訳 『児童発達の理論』 新曜社

A Study of Mothers' Recognition of their Children's Independence

Yukiyo UENISHI

This paper is about mothers' recognition of their children's independence. First, the relationship between mothers and children is explained from children and mothers' points of view. Second, through the interview with mothers, the author shows when and why mothers recognize that their children come to be independent. In addition, it is also examined whether mothers feel lonely and empty at the time when their children begin to be independent. In short, mothers feel that it requires time for children to become independent completely. Though some of the mothers experience loneliness and emptiness because of their children's independence, the negative feeling usually does not last long and mothers can enjoy their life with feeling of relief.